

産業革命と社会問題

今回学ぶこと

18世紀の後半にイギリスで、綿工業における技術革新を皮切りに、機械と動力を用いる大規模な工場制度が普及して飛躍的に生産性が高まった。経済の中心が農業から工業へと大きく変革し、これを産業革命という。産業革命によって人々の生活様式は大きく変容した。産業革命は生産性を向上させた反面、工場を経営する資本家による労働者の酷使などの深刻な社会問題を引き起こし、富の公平な分配を目指す社会主義思想が発展するようになった。今回は産業革命が引き起こした人々の暮らしの変化と社会の矛盾について学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- 身近な鉄道路線がいつ開通したものか調べてみよう。
- 世界のさまざまな国の都市化率（全人口に占める都市人口の割合）を調べてみよう。
- 労働者の権利を守る法律にはどのようなものがあるか調べてみよう。

産業革命とは何か

18世紀後半、大西洋の三角貿易を通じて資本を蓄積し、綿花などの原料へのアクセスを確保していたイギリスでは、他方で農業革命を通じて人口が増大し、大量の労働者・消費者が準備されていた。

綿織物は17世紀以来インドからの輸入に頼っていたが、上の条件にあわせて、飛び梭（ジョン・ケイによる飛び梭の発明、1733年）、紡績機（ハーグリーブスによるジェニー紡績機の発明、1764年ごろ）、アークライトによる水力紡績機の発明、1769年、クロンプトンによるミュール紡績機の発明、1779年）、蒸気機関（ワットによる蒸気機関の改良、1765～69年）、織機（カートライトによる力織機の発明、1785年）などの技術革新の連鎖が生じて、国産化が可能になった。機械と動力を用いた大規模な工場制機械工業は大量生産を可能にし、それまで職人がもっていた熟練技術の意味は薄れ、工場で働く賃金労働者へと変わっていった。

生活様式の変化

産業革命は人口の都市への移動を引き起こした。産業革命以前は人口の大半は農村に居住して農業に従事していたが、産業革命以後、人口の過半は都市に居住するようになり、その多くは工場で働く労働者となった。農業社会から工業社会への転換は、定時の通勤や制度化された休暇など工場での生産活動に合わせた生活様式を一般化させた。

また、衣食の生活のすみずみに大量生産された消費財が流通するようになり、蒸気機関を応用した交通機関（鉄道、蒸気船）の発達にともなって、余暇（レジャー）の消費も普及した。鉄道路線が景勝地に延伸され、宿泊施設や飲食店が整備されたり遊園地などが建設されたりして観光地が形成されるのも、産業革命以降のことである。

労働問題と社会問題

工場制の拡大は、多くの賃金労働者を生み出した。そのなかには社会的な立場が弱く安価な労働力として、女性や子どもも多く含まれていた。労働者はしばしば危険で劣悪な労働環境のなかで長時間、酷使され、大きな社会問題となった。

イギリスでは、政府は工場法を出して、労働時間の短縮、女性や子どもの労働条件の改善を図ろうとした。他方、労働者も団結して労働組合を結成し、資本家に対して団体のちからで労働条件の改善を求めるようになった。このような労働運動が次第に過激になると、社会秩序の混乱を恐れた政府は、団結禁止法（1799年）を制定して、これを弾圧した。

特に職を失った職人のなかには機械の普及が社会問題の源泉であると捉えて、機械打ちこわし（ラダイト）運動を展開する者もあったが、そうした運動は1810年代を境に衰え、かわってイギリスのオーウェンやフランスのサン・シモン、フーリエ、ブルードンら、資本家と労働者のあいだの階級の不平等を解消した理想の社会を構想する社会主義の思想が現れるようになった。特にマルクスとエンゲルスは資本主義社会の原理的矛盾を説く社会主義理論を展開し、後世に大きな影響を与えた。